

I. 電磁気（静電誘導，ガウスの法則）

【メモ】

・ 導体内部の電場は 0 となる*1. 電場は電荷から湧き出すため，内部の電荷も 0 となり，帯電は表面にのみ起こる.

【解答】

〔A〕 誘電率を ε_0 とすると，クーロンの法則の比例定数 k は，

$$k = \frac{1}{4\pi\varepsilon_0}$$

と関係付いている．ここでは， $\varepsilon_0 = \frac{1}{4\pi k}$ を用いて文字消去する．

(1) ガウスの法則より，

$$E(S + S) = \frac{Q}{\varepsilon_0} = 4\pi k Q, \quad E = \frac{2\pi k Q}{\underbrace{S}}$$

(2) 導体内部の電荷は $Q_{\text{内部}} = 0$ である．導体の上側表面に帯電する電荷を q_1 ，下側表面に帯電する電荷を q_2 とする．導体は電氣的に孤立しているから，電荷保存則より，

$$q_1 + q_2 = 0.$$

また，導体内部の電場は 0 であるから，ガウスの法則より，

$$\frac{2\pi k Q}{S} - \frac{2\pi k q_1}{S} + \frac{2\pi k q_2}{S} = 0.$$

以上 2 式より，

$$\begin{cases} q_1 + q_2 = 0, \\ \frac{2\pi k}{S}(Q - q_1 + q_2) = 0 \end{cases} \quad \therefore q_1 = \frac{Q}{2}, \quad q_2 = -\frac{Q}{2}.$$

(3) 導体内部の電場は $E_{\text{内部}} = 0$ である．また，導体上側の電場は前問の結果より，

$$E_{\text{上側}} = \frac{2\pi k Q}{S} + \frac{2\pi k Q/2}{S} + \frac{2\pi k(-Q/2)}{S} = \frac{2\pi k Q}{\underbrace{S}}.$$

(4) 導体の上側表面に帯電する電荷を q_3 ，下側表面に帯電する電荷を q_4 とする．導体をアースに繋いでいることから，導体上側の電位差は 0，すなわち電場も 0 である．よって，ガウスの法則より，

$$\begin{cases} \text{内部} : \frac{2\pi k Q}{S}(Q - q_1 + q_2) = 0, \\ \text{上側} : \frac{2\pi k}{S}(Q + q_1 + q_2) = 0 \end{cases} \quad q_3 = 0, \quad q_4 = -\frac{Q}{2}.$$

*1 電流が流れているような場合は異なる．

- (5) 導体に帯電している電荷 $-Q$ が誘電体の作る電場 $E = \frac{2\pi kQ}{S}$ から受ける力の大きさは、

$$F = |-Q|E = \frac{2\pi kQ^2}{S}$$

である (図の下向き)。よって、仕事の定義より、

$$W = \begin{pmatrix} 0 \\ -\frac{2\pi kQ^2}{S} \end{pmatrix} \cdot \begin{pmatrix} 0 \\ h \end{pmatrix} = -\frac{2\pi kQ^2 h}{S}$$

であり、仕事の大きさは

$$|W| = \frac{2\pi kQ^2 h}{S}$$

- [B] (1) ガウスの法則より、導体球内部の電場は、

$$E_{\text{内部}} \cdot 4\pi r^2 = \frac{0}{\epsilon_0} \quad E_{\text{内部}} = 0.$$

同様に、外部電場は、

$$E_{\text{外部}} \cdot 4\pi r^2 = \frac{Q}{\epsilon_0} = 4\pi kQ \quad E_{\text{外部}} = \frac{kQ}{r^2}$$

- (2) 電位の定義より、

$$V = -\int_{\infty}^R E_{\text{外部}} dr = -\int_{\infty}^R \frac{kQ}{r^2} dr = \frac{kQ}{R}$$

- (3) 容量は定義より、

$$C = \frac{Q}{V} = \frac{R}{k}$$

である。よって、公式より、

$$U_e = \frac{Q^2}{2C} = \frac{kQ^2}{2R}$$

- (4) 題意より、系のエネルギーは、

$$U(R) = U_e + U_s(R) = \frac{kQ^2}{2R} + 8\pi aR^2$$

と書ける。 R が十分小さい範囲では $\frac{1}{R}$ が支配的になり、 R が十分大きい範囲では R^2 が支配的になる。以上を踏まえれば (e) が適当である。

- (5) 半径 R の微小変化に伴う系のエネルギー変化は,

$$\begin{aligned}
 \Delta U &= U(R + \Delta R) - U(R) \\
 &= \frac{kQ^2}{2(R + \Delta R)} + 8\pi a(R + \Delta R)^2 - \frac{kQ^2}{2R} - 8\pi aR^2 \\
 &= \frac{kQ^2}{2R} \left(1 + \frac{\Delta R}{R}\right)^{-1} + 8\pi aR^2 \left(1 + \frac{\Delta R}{R}\right)^2 - \frac{kQ^2}{2R} - 8\pi aR^2 \\
 &\doteq \frac{kQ^2}{2R} \left(1 - \frac{\Delta R}{R}\right) + 8\pi aR^2 \left(1 + \frac{2\Delta R}{R}\right) - \frac{kQ^2}{2R} - 8\pi aR^2 \\
 &= \underbrace{\left(-\frac{kQ^2}{2R^2} + 16\pi Ra\right)} \Delta R.
 \end{aligned}$$

- (6) $\Delta U = 0$ を考えて*2,

$$\left(-\frac{kQ^2}{2R^2} + 16\pi Ra\right) \Delta R = 0 \quad \therefore R = \underbrace{\left(\frac{kQ^2}{32\pi a}\right)^{\frac{1}{3}}}.$$

*2 エネルギーが極小値を取るとき安定した状態が実現される. そのため $\frac{\Delta U}{\Delta R} = 0$ を考えればよい.

II. 力学（等加速度運動，等速円運動，衝突）

【メモ】

・等加速度運動は①時間追跡，②エネルギーの2通りで解くことができる。時刻 t を求める場合は①一択となる。

・等速円運動は以下2式の連立。

$$\begin{cases} \text{運動方程式（中心成分）} \\ \text{つりあい ← 使わない場合もあり} \end{cases}$$

・衝突は以下2式の連立。

$$\begin{cases} \text{衝突の直前・直後の運動量保存則} \\ \text{問題で指示された条件} \end{cases}$$

ただし，固定面など外力制御された物体との衝突では運動量は保存しない。

【解答】

[A] (1) 運動方程式より，

$$\begin{cases} ma = -mg \cos \theta, \\ m \cdot 0 = N - mg \sin \theta \end{cases} \quad \therefore N = \underbrace{mg \sin \theta}, \quad a = -g \cos \theta.$$

(2) 物体のエネルギー収支より，

$$\begin{aligned} \frac{1}{2}mv^2 - \frac{1}{2}mv_0^2 &= \begin{pmatrix} -mg \cos \theta \\ N - mg \sin \theta \end{pmatrix} \cdot \begin{pmatrix} L \\ 0 \end{pmatrix} \\ &= -mgL \cos \theta \\ \frac{1}{2}mv^2 &= \frac{1}{2}mv_0^2 - mgL \cos \theta > 0 \quad \therefore v_0 > \underbrace{\sqrt{2gL \cos \theta}}. \end{aligned}$$

(3) $a = -g \cos \theta$, $x(0) = 0$, $v(0) = v_0$ より，

$$\begin{cases} x = v_0 t - \frac{1}{2}g \cos \theta t^2, \\ v = v_0 - g \cos \theta. \end{cases}$$

$x = L$ を解いて，

$$\begin{aligned} v_0 t - \frac{1}{2}g \cos \theta t^2 &= L \\ t^2 - \frac{2v_0}{g \cos \theta} t + \frac{2L}{g \cos \theta} &= 0 \quad \therefore t = \underbrace{\frac{v_0}{\cos \theta} \left(1 - \sqrt{1 - \frac{2gL \cos \theta}{v_0^2}} \right)}. \end{aligned}$$

また，このとき，

$$v = v_0 - g \cos \theta \cdot \frac{v_0}{\cos \theta} \left(1 - \sqrt{1 - \frac{2gL \cos \theta}{v_0^2}} \right) = \underbrace{\sqrt{v_0^2 - 2gL \cos \theta}}.$$

[B] (1) 運動方程式（中心成分），つりあい（鉛直成分）より，

$$\begin{cases} m \frac{V^2}{R \sin \theta} = N \cos \theta, \\ m \cdot 0 = N \sin \theta - mg \end{cases} \quad \therefore N = \frac{mg}{\sin \theta}, \quad V = \sqrt{gR \cos \theta}.$$

(2) 衝突直前の質点の速さ v は，力学的エネルギー保存則より，

$$\frac{1}{2} m v^2 + \frac{1}{3} mgr \cos \theta = \frac{1}{2} m (3V)^2 \quad \therefore v = \sqrt{9V^2 - 2gR \cos \theta} = \sqrt{7gR \cos \theta}$$

衝突直後の母線に沿った方向（ r 方向と呼ぶ）の速度成分を v_r ，小物体が衝突直前に運動していた円軌道方向（ ϕ 方向と呼ぶ）の速度成分を v_ϕ とする．衝突ゆえ衝突の直前・直後の運動量保存則より，

$$\begin{cases} r \text{ 方向} : mv_r + \frac{m}{3} v_r = \frac{m}{3} \sqrt{7gR \cos \theta}, \\ \phi \text{ 方向} : mv_\phi + \frac{m}{3} v_\phi = mV \end{cases} \\ \therefore v_r = \frac{3}{4} \sqrt{gR \cos \theta}, \quad v_\phi = \frac{1}{4} \sqrt{7gR \cos \theta}.$$

(3) 衝突直後の力学的エネルギーは，

$$\begin{aligned} E &= \frac{1}{2} \cdot \frac{4}{3} m (v_\theta^2 + v_r^2) + \frac{4}{3} mgR \cos \theta \\ &= \frac{2}{3} \left(\frac{9}{16} gR \cos \theta + \frac{7}{16} \cos \theta \right) + \frac{4}{3} mgR \cos \theta \\ &= \underline{2mgR \cos \theta}. \end{aligned}$$

(4) 力学的エネルギー保存則より，

$$\frac{1}{2} \cdot \frac{4}{3} m v^2 + \frac{4}{3} mgr \cos \theta = 2mgR \cos \theta \quad \therefore v = \sqrt{(3R - 2r)gR \cos \theta}.$$

III. 波動（レンズ，幾何光学）

【メモ】

・凹凸レンズ（球面鏡）の写像公式は凸レンズ・凹レンズの写像公式：

レンズと物体の距離を a ($a > 0$ はレンズ前方)，レンズと像の距離を b ($b > 0$ は光線の進行方向に取る)，レンズの焦点距離を f とする。

$$\frac{1}{a} + \frac{1}{b} = \begin{cases} \frac{1}{f} & (\text{凸レンズ, 凹面鏡}) \\ -\frac{1}{f} & (\text{凹レンズ, 凸面鏡}) \end{cases}$$

なお，レンズ前方に生じるような像（虚像）の場合 $b < 0$ となり，組み合わせレンズを考える場合，1 つ目のレンズによって $a < 0$ となる位置に仮想的に結像する像を虚光源という。また，レンズの倍率 m は，

$$m = \left| \frac{b}{a} \right|$$

となり，中身の符号が正であれば倒立，負であれば正立である。

・幾何光学の図形の考察は，与えられている量の組み合わせによって以下のように考える。

$$\left\{ \begin{array}{l} \text{角度のみ} \rightarrow \left\{ \begin{array}{l} \text{三角形の内外角に注目（二等辺三角形に注意）} \\ \text{平行性の性質を利用（錯角・同位角）} \end{array} \right. \\ \text{長さのみ} \rightarrow \text{相似な三角形の相似比を利用} \\ \text{角と長さ} \rightarrow \text{三角比を利用（正弦定理・余弦定理に注意）} \end{array} \right.$$

〔C〕の (1) は角度と長さが与えられているので三角比を利用すればよい。

【解答】

(1) (a) 倒立実像が観測され，原点对称の像となる。よって，(エ) となる。

(b) 光量が減るだけだから像の形は変わらず (ウ)，像の明るさは暗くなる (ア)。

(c) $\frac{1}{a'} < \frac{1}{a}$ であることを踏まえ，写像公式より，

$$\left\{ \begin{array}{l} \frac{1}{b} = \frac{1}{f} - \frac{1}{a} \\ \frac{1}{b'} = \frac{1}{f} - \frac{1}{a'} \end{array} \right. \quad \therefore \frac{1}{b'} > \frac{1}{b} \quad \therefore b' < b \text{ (ウ)}.$$

(d) $a < a'$ ， $b' < b$ より，

$$m = \frac{b}{a} > \frac{b}{a'} > \frac{b'}{a'} = m' \quad \therefore m > m' \text{ (ウ)}.$$

(e) 写像公式より,

$$\frac{1}{f} = \frac{1}{a} + \frac{1}{b}$$

$$\therefore f = \frac{ab}{a+b} = \frac{60.0 \times 36.0}{60.0 + 36.0} \text{ cm} = \underline{\underline{22.5 \text{ cm}}}.$$

また, このときの倍率は,

$$m = \left| \frac{36.0}{60.0} \right| = 0.600$$

であるから像の半径 r' は

$$r' = 0.600 \times 3.00 \text{ cm} = \underline{\underline{1.80 \text{ cm}}}.$$

(2) $b = -24 \text{ cm}$, $f = 8.0 \text{ cm}$ である. 写像公式より,

$$\frac{1}{a} + \frac{1}{-24} = \frac{1}{8} \quad \therefore a = \underline{\underline{6 \text{ cm}}}.$$

このときの倍率は,

$$m = \left| \frac{-24}{6.0} \right| = \underline{\underline{4.0}}.$$

(3) (a) 物体の大きさを h_1 , 実像の大きさを h_2 , 虚像の大きさを h_3 , 対物レンズと物体の距離を a_1 , 接眼レンズと虚像の距離を a_2 とすると, 図より,

$$\begin{cases} h_1 = a_1 \tan \theta_o, \\ h_2 = f_o \tan \theta_o = f_e \tan \theta_e, \\ h_3 = a_2 \tan \theta_e \end{cases}$$

が成り立つ. 各角度について $\tan \theta \doteq \theta$ と近似して,

$$\begin{cases} h_1 \doteq a_1 \theta_o, \\ h_2 \doteq f_o \theta_o = f_e \theta_e, \\ h_3 \doteq a_2 \theta_e. \end{cases}$$

よって, 題意に従って,

$$M = \frac{\theta_e}{\theta_o} \doteq \frac{h_2/f_o}{h_2/f_e} = \frac{f_o}{\underline{\underline{f_e}}}.$$

なお, 図では $a_2 \doteq a_1 + f_o$ であるが像はいずれも無限遠にあり f_o は無視でき, $a_1 \doteq a_2$ と考え, 各レンズの倍率を求め総合倍率を求めれば,

$$M = m_o m_e = \frac{h_2}{h_1} \frac{h_3}{h_2} \doteq \frac{f_o \theta_o}{a_1 \theta_o} \frac{a_2 \theta_e}{f_e \theta_e} = \frac{a_2}{a_1} \frac{f_o}{f_e} \doteq \frac{f_o}{\underline{\underline{f_e}}}.$$

(b) $M = \frac{f_o}{f_e}$ より,

$$f_e = \frac{f_o}{M} = \frac{800}{160} \text{ mm} = \underline{\underline{5.0 \text{ mm}}}.$$

(c) 分散（波長による屈折率の違い）によるものである。